

カバニージャスの作品に見るガリシア語の言語分析

浅 香 武 和

はじめに

筆者は、これまでラモン・カバニージャス Ramón Cabanillas (1876 – 1959) の文学作品の翻訳をおこなっている。翻訳にあたり様々な難解な語句に直面したことから、カバニージャスの作品に見るガリシア語について、現行の規範ガリシア語の正書法 *Normas ortográficas e morfolóxicas do idioma galego*. Real Academia Galega, Instituto da Lingua Galega e Xunta de Galicia. 第21版. 2007. (Normativo Oficial: 略語 N.O.) に照らし合わせながら、表記について、音声現象、形態統語論、語彙の面において分析を行い、文学上の表現を構成するカバニージャスのガリシア語の言語特性を考察する。

I ガリシア語の正書法について

20世紀初頭、スペインのガリシアではガリシア翰林院 Real Academia Galega: RAG (1906) 創立後、ガリシアナショナリズム運動が展開され、マニフェストとしてガリシア語の使用が掲げられた。ことばの友好協会 Irmandades da Fala (1916) の設立、文芸誌『我らの大地』 *A NOSA TERRA* および『評論我等』 *Revista Nós* が発行された。第一回ガリシアナショナリスト大会 I Asamblea Nazionalista Galega (1918) により、辞書、文法書、言語研究の促進と行政と教育におけるガリシア語の使用が図られた。詩人カバニージャスも当然のごとくこれらの運動に参画し、正書法の制定メンバーの一人となった。この時代ガリシア語による最初の文法書 Manuel Lugo Freire: *Gramática do idioma galego*. A Cruña, 1922, a segunda edición 1931. が刊行された。しかし、1936年にはスペイン市民戦争が勃発し、自治州憲章案の審議は中断した。

フランコ政権下の1960年代末に、ガリシア語の書き言葉による規則の必

要性が叫ばれ、ガリシア翰林院は1970年に「ガリシア語の正書法」を発表し、翌年の1971年には「ガリシア語の正書法と形態の規則」を公刊した。

そして、フランコ政権後、スペイン憲法制定(1978)、ガリシア自治州憲章制定(1981)、言語正常化法(1983)が承認された。スペイン憲法制定以前に、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学では1976年12月から1977年6月にガリシア語の正書法委員会が審議した素案 *Bases pra unificación das normas lingüísticas do galego* が1977年12月に発表された。この基盤となる正書法の規則はサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学とガリシア翰林院が発表したものである。さらに修正がなされて1982年11月にはガリシア自治州政府が正書法を承認した。正書法は時々見直され、現在の「ガリシア語の正書法と形態の規則」*Normas ortográficas e morfolóxicas do idioma galego* は、2003年6月ガリシア翰林院の総会によって認可された。

まず、カバニージャスがガリシア翰林院入会記念講演録「ガリシアの詩人における孤愁」*A Saudade nos poetas gallegos* (1920)の初版本の復刻版 *Xunta de Galicia* 発行(2000)を見ると、表記は、現行のガリシア語の規則と異なる点がある。カバニージャスが作品のなかで表した正書法は、Lugris Freire (1922, 1931)にしたがっている。ルグリス・フレイレは、文法書のプロソディの項目で、曲折アクセントは開母音を示すほかに、おもに最後の音節に強勢アクセントがあるときに使うとして *irmâ* 姉妹, *abô* 祖父, *xenerâs* お前が引き起こす、をあげている。さらに定冠詞 *a* と前置詞 *á* の縮約形を *â* のように定め、また接続詞 *e* と *ser* 動詞直説法現在三人称単数形を混同しないように動詞には *ê* と示している: *e dixome como ê certo que mañán coida ir â Cruña* そして、明日、コルーニャに行くと思うのは確かだと彼女は私に言った。(p.9)

さらに、当時出版された *Leandro Carré Alvarellos: Dicionario galego-castelán. A Coruña, 1928, outava edizón, 1984.* の辞書には、つぎのように記述されている。「曲折アクセントは、とくに縮約をうける音節において、開いた母音かつ長い発音を示す。前置詞 *a* と定冠詞女性形 *a* の縮約形が *â* と表記される。前置詞 *con* と定冠詞男性形 *o* の縮約形は *cô* と表記される。そのほかに、*âr* 空気, *irmâ* 姉妹, *tecelâ* 織工, *bô* 良い, *dô* 動詞 *doer* 痛むの直説法現在一人称単数形の活用, *sô* ~だけ、などがある。中世ガリシア語では *aa*, *coo*, *irmaa*, *tecelaa*, *boo*, *soo*」と書かれている XXVII 頁。動詞 *dô*, 名詞 *dôr* のように曲折アクセント符号が付けられているが、現行の表記では、直説法現在形一人称単数形は語根と変化語尾の間に形態的な価値とは関係なく *-i-* が挿入される形態 *doio* となる。

1) 曲折アクセント (^)circunflexo の使用。開母音としてあつかう。

A Saudade nos poetas gallegos (1920) の場合

Cabanillas の使用	Normativo Oficial (N.O.)	解説
â ~へ、に	á	前置詞 a と定冠詞女性単数形 a の縮約形
âs âs veces 時々	ás	前置詞 a と定冠詞女性複数形 as の縮約形
ê	ê	動詞 ser の直説法現在形三人称単数形
ô ô ferir 傷つける時 ô longo に沿って ô través を通じて	ó または ao ao través	前置詞 a と定冠詞男性単数形 o の縮約形
pôn 置く	pon	動詞 poner の直説法現在三人称単数形
tên 持つ	tén	動詞 ter の直説法現在三人称単数形
vên 来る	vén	動詞 vir の直説法現在三人称単数形

カバニージャスは、1920年の講演録では曲折アクセントを使用している。さらに1926年に発行された *Na noite estrelecida*. Mondariz-Balneario, Edición LAR, 1926. (『星をちりばめた夜に』)の初版本を見ると、同様に曲折アクセントの使用が確認できる。

âs proféticas, ô arroilo, ôs rochedos, â outura, ô raio, âs ágoas, âs nubes, â ardentía, ôs pés, ô reprandor, ô águia, ô circo, ô povo, ô forte, ô mundo, ô ceo, ô seu paso, ir â Empresa, ô ver, â terra, â pedra, ô mediar, â valgada, ô son de, ô ceo, ô raial

ただし、つぎの場合はどうだろうか？前置詞 á と定冠詞男性単数形 o の縮約性は ô とされるところであるが、ó seu paso (p.36), ó seu amor (p.39), ó pasiño (p.44) のように揺れが見られる箇所がでてきている。

次に、1927年4月24日にガリシア研究セミナー Seminario de Estudos Galegos で、口頭発表した「フランケイラのわが聖母への巡礼」As romaxes de nosa Señora de Franqueira を考察してみる。この発表は、後に *Reviata Nós*,

número 42, pp.2-6. 1927年6月15日に発行された。幸いにも、この文芸誌が最近になり Xunta de Galicia 2020 の文化プロジェクトによりデジタル化されたので、このデジタル版と 1959年にブエノス・アイレスで刊行された Ramón Cabanillas: *Obra completa*. Buenos Aires, Ediciones Galicia, 第二版, 1978. と照合してみる。さらに Ramón Cabanillas: *Obra completa*, III. Madrid, Akal, 1981, pp.428-436. Edición de X. Alonso Montero も参照すると、この版は現行の表記法に準じていることがわかる。

â luzada, ô son â altura, â alma, ô traspor, ô resprandor, âs costas, â volta, â contesta, â ponla, âs portas, ô abrigo, ô porche, â morte, ô Rei, ô home, ô pé, ô peito, ô paso, ô carro, ô cair

このように、â, ôの曲折アクセントは確認できるが、母音 e の曲折アクセント êの場合は、éのようにアクセント符号を付加した強勢アクセント(‘acento agudo)で示している。

É unha vella creencia. 古い信仰です、É o mediodía. 正午です。

最後に、1927年3月に発行された *A rosa de cen follas*.『百葉の薔薇』Mondariz Balneario, 1927. では、曲折アクセントの使用はどうだろうか？

1920年の講演録と1927年の文芸誌に寄稿した作品をみると、文芸誌では êの使用はなくなった。1981年の Akal 版は現行の表記法にしたがっている。1927年3月に発行された詩集 *A rosa de cen follas* の初版本では、曲折アクセントの使用はない。これらから判断すると、1926年の *Na noite estrelecida* を著したころから、カバニージャスは徐々に曲折アクセントの使用を避けるようになり、1927年の *A rosa de cen follas* では完全に使用されていないことがわかる。現行のガリシア語の正書法では、曲折アクセントは使用されないが、現在、ロマンス語のなかではフランス語、ポルトガル語、ルーマニア語において使われている。

2) ハイフン guión の使用

前置詞 con, de, en, por に定冠詞、不定冠詞、人称代名詞三人称単数・複数形、指示詞を従える時に使用される縮約形。好音調 eufonía による。

Cabanillas	N.O.	解説
c-o co-a co-unha com-unha rosa co-eles co-estas	con+o> co con+a>coa con+unha>cunha cunha rosa con eles con estas	縮約により o, n が消失 com は誤記か?

d-un d-unha d-esta	de+un> dun de+unha> dunha de+esta> desta	縮約により母音 e が消失
--------------------------	--	---------------

n-un n-él n-Ela n-unha n-ese n-aquel n-eles pol-a pol-o mundo 世界を pol-os ventos 風を todol-os días 毎日 témol-a luz 我々は光がある	en+un> nun en+el> nel en+ela> nela en+unha> nunha en+ese> nese en+aque > naquel en+eles> neles por+a> pola por+o mundo> polo mundo por+os ventos> polos ventos todos+os días> tódolos días temo+a luz> temo-la luz	縮約により母音 e が消失 縮約により子音 r の交替 縮約により子音 s の交替
--	--	---

現行の表記法では、このようなハイフンの使用はなくなっている。ただし、-r, -s で終わる動詞と代名詞に定冠詞が続く場合はハイフンが使用され、第二定冠詞として現れる: vou colle-las laranxas オレンジをとろう (vou coller as laranxas), tráiovo-lo libro mañá 明日、君たちに本を持ってくる (tráiovos o libro mañá)。こうした規則があるが、ジャーナリズムや一部の作家の文章にはハイフンを使わない文章を時々見かけることがある。

Todas as forzas do espírito están conosco … (González Tosar) .すべての精神力は我々とともにある・・・

前置詞 por、形容詞 todos、さらに -r, -s で終わる動詞に定冠詞または弱形代名詞が続くとき、-l- の音に同化して、重子音が単純化する。新たに出現

した -l- は定冠詞または弱形代名詞の傍に置かれる。アクセントのない形態素はさして重要ではないが、意義素はガリシア語のこうした傾向により変化を受けている。このような接合の表記は、現行の表記法ではいくぶん簡潔になっているが、当時のガリシアの作家たちはそれぞれ好みの形式を使用していた：face-lo, facel-o, face-l-o, n-un, co' el, co-aquel. これらの表記は、語そのものの個性を考慮していないと考えられる。現行では facelo, cun, daquel のようである。

A rosa de cen follas (1926) を調べると、曲折アクセントの使用はないが (ó pé の表記はなく、ó pé と表記)、ハイフンの使用は次のように確認できる。

n-el, c-o amor, pol-o sangue, n-un balcón, n-unha bigornia, n-un bico, c-o corazón, n-unha ponla, ve-la, n-esa hora, c-o tempo, ni-unha estrela, ni-un, chí-o, co-as que, c-un cariño, n-o chamarás, pol-as noites, c-o filliño, pol-o amor, pol-a folla, pol-os relembrós, c-o dor.

カバニージャスは、前置詞 *de* と不定冠詞 *un, unha* の縮約形の場合、前置詞の語尾母音 *e* が消失し *d-un (dun), d-unha (dunha)* のようになる。作品の中には形態素の本来の形態に戻す場合も見られる：*breviario de un amor, son asento de un trono, no ceo de unha noite de Nadal* … (AR). :*dempóis de un bó anaco.* (RF)

3) 否定の副詞 *non*, 接続詞 *nin* の表記

- ・ 否定の副詞 *non* は次に続く定冠詞が母音の場合、語尾の *-n* は定冠詞 *o* と接合して *no-no* という形態をとる。() は現行規則の表記。規範ガリシア語ではこのような表記はなくなった。

que mellor no-no movera (non o movera) – o carpinteiro que o fixo, (VM)
それをした大工が動かさないほうが良いだろう。

- ・ 母音の前では *non, nin* の語末の *-n* が削除される場合
ni-outro (nin outro) honor, no-é (non é) home, súa axuda ni-a (nin a) dos seus, no-hai (non hai), ni-un (nin un) maino rumor, ni-un (nin un) brillo si no-escoitache (non escoitache).

II カバニージャスの作品に見るガリシア語の言語分析

次にカバニージャスの作品から音声、形態統語、語彙の面から分析をおこなう。対象とする作品は、韻文 *Da terra asoballada*: 略語 *TA* (1917, 1926),

Vento mareiro: 略語 *VM* (1921), *Na noite estrelecida*: 略語 *NE* (1926), *A rosa de cen follas*: 略語 *RC* (1927), 散文と韻文 *As romaxes da Franqueira*: 略語 *RF* (1927) である。

分析に使用したテキストは *Poesía galega completa*. Edición de X. María Dobarro e X. Ramón Pena. Vigo, Xerais, 2009. カバニージャスの全詩集を参照して分析した。この全集は現行の表記法にしたがっている。しかし、次の作品は初版本と全詩集を対比参照した。*Na noite estrelecida*, *A rosa de cen follas*, *As romaxes de Nosa Señora da Franqueira*.

1. 音声現象 Fenómenos fonéticos について

1) 弱勢母音の揺れの現象 (vacilacións vacálicas nas átonas)

i/e および u/o の交代

Cabanillas <i>RC</i>	Normativo oficial	日本語訳
ágoa	auga	水
boeno	bo	感嘆詞, そうですねえ
dibuxo	debuxo	デッサン
homildes	humildes	卑しい
igoal	igual	~と同じ
si	se	接続詞…であれば
sin	sen	前置詞~のない
soave	suave	柔らかい
surrisas	sorrisas	sorrir 微笑する
surrindo	sorrindo	現在分詞形
Cabanillas <i>VM</i>		
aguíña	agonía	断末魔
anduriña	andoriña	燕
antre	entre	…の間に
arbres	árbores	女性名詞 樹木
cencia	ciencia	科学
coadrada	caadrada	四角の
coadro	cadro	絵画
concencia	conciencia	良心
condanado	condenado	判決を受けた
croel	cruel	残酷な

espranza	esperanza	希望
estúdeo	estudo	勉強
furruxenta	ferruxenta	錆びた
mormorio	murmurio	ぶつぶつ言うこと
siñores	señores	紳士方
soavidá	suavidade	柔らかさ
sospenso	suspensio	つり下がった
socedia	sucedía	生じていた
último	último	最後の
xuguetona	xoguetona	遊び好きな
xuglares	xograres	吟遊詩人

2) 母音 i の挿入 (o i epenético)

Vento mareiro から採集

doio	doio 痛い	動詞 doer 直説法現在一人称単数形
leails	leal, leais 誠実な	複数形はカステラニスモ
maestro	mestre, maestro 教師、親方	カステラニスモの異形
traiercho (traier+che+o)	traercho (traer+che+o) それを君に持ってくる	ポンテベドラ県の一部で traír がある
saien	saen 出かける	動詞 saír の直説法現在形
seias	sexas~ である	動詞 ser の接続法現在形
soio	só ~ だけ	Carré の辞書に sô, soio, soyo が ある。 Irmanadade の語彙集に sò, soio がある。
reial	real 実際の	
leio	leo 読む	動詞 ler 直説法現在一人称単 数形
receioso	receoso 疑い深い	
deseios	desexos 願望	

- ・ a ialma 魂 (a alma) 二重母音にならない母音連続イアト (hiato) を構成する 2 つの母音の間にイオド (iode) 硬口蓋的要素の音が挿入される。(T4)
- ・ 動詞においては、語根と変化語尾の間に母音の i が挿入される saio の場合は、ガリシア西部地域アロウサでは salo となる。

- 3) ロタシスモ (rotacismo) は、語中の音が r に代替される音声現象。ガリシア語では2つの定義がある。1. 音節の終わりの s が r として発音される音声現象で、次の子音が有声音、歯間音または唇歯音の時に生じる : os días → or díar 日々, son hórar de merendiña おやつの時間だ, que sigan ar bodas 結婚式が続く。2. 側面音 l が振動音 r に代替される現象をいう。

カバニージャスの作品の場合は組子音 fl-, gl-, cl-, -pl- の場合に見られ、l が r に替わる。この事例は、カバニージャスがカステリーリヤ語と異なることを表そうと模索したように考えられる。その形態は新たに創られた人工的なもので、システムティックに l から r に変わる。A rosa de cen follas から採集

fror	flor 花	frol, flor, fror の形態が Carré の辞書に確認できる。
frido	florido	花盛りの
goria	gloria	栄光
craros	claros	明るい
craridade	claridade	明るさ
resprandor	resplandor	輝き
branco	blanco	白い
cramor	clamor	叫び、甲いの鐘
tempo	templo	礼拝堂

ロタシスモとは逆の現象が見られる : sur 南 > sul (RF)。この場合は、sul をポルトガル語主義ととらえるのが良いかと思う。Carré の辞書には見出し語として登録されている。

- 4) 無声歯茎摩擦音セセオ (seseo) の表記 : 歯間摩擦音 / θ / が無声尖頭歯茎摩擦音 /s/ で発音される音声現象で、ガリシア西部地域とくにリアス・バイシャスの人々の口語に現れる特徴。

Vento mareiro: asio (acio) 房, diesmo (dezmo) 十分の一税, simeterio (cemiterio) 墓地, esgasa/ esgazou (esgaza/ esgazou) 引き裂く, calsó s 複数形で -n- 消失 (calzóns) パンツ。

Da Terra asoballada: crus (cruz) 十字架, lus (luz) 光, vos (voz) 声。

セセオは話し言葉に現れる音声特徴であるが、カバニージャスの作品のなかでは、ここに挙げた語に確認できる。語頭、語中、語末音に表記上 s

音があらわれている。また、1つの作品のなかで *esgasa* と *esgazou* は /s/ と /θ/ が混在している場合もある。伝承歌のなかでも、**disme que non teño amores** が確認できる。Ramón Cabanillas: *Antifona da Cantiga*. Vigo, Galaxia, 1951. p.29.

5) ヘアーダ (gheada) の表記: 子音 g [ɣ] を咽頭氣息音 [h] として発音するガリシア語の音声特徴で、ガリシア西部地域に顕著に表れる。例えば、「猫」を意味する *gato* は [ˈɣato] が規範の発音であるが、西部地域では [ˈhato] のように発音される。カバニージャスもヘアーダ話者であったが、作品”*As Tardes na Pastora*”の中では脱ガリシア語化を図っている語が一つだけあげられる: *a collar caramuxos e buxinas* (アオマブネ貝とホラ貝を採りに)。この *buxinas* は、カスティーリャ語 *bujina* またはカステラニスモの *bughina* から脱口蓋音され、創りあげられたヘアーダの書き言葉であろう。

6) 教養語における組子音 -ks-, -mn- の単純化 (*simplificación dos grupos cultos*). 最初の -x-, -m- が消失する。

A rosa de cen follas, VM から採集

- *exaltación* 高揚 > *esaltación*, *explicar* 説明する > *espricar*, *experiencia* 経験 > *esperencia*
しかし、次の場合は *exacular* 射精する /ɛjakuˈlar/ は、単純化は起こらない。
- *columna* 円柱 > *coluna*, *himno* 賛歌 > *hino*, *solemne* 厳かな > *solene*, *somnolenta* けだるい > *sonolenta*

7) 音位転換 (*metáteses*): ある語の内部である音の位置が替わる音声現象。ガリシア語では r の転換がよく見られる: *pobre* > **probe*. VM, RC から採集。
() 内が現行の表記。

- 隣接転換: *bulrado* (*burlado* 回避した), *preseguido* (*perseguido* 追跡した), *fror* (*flor*), *tromenta* (*tormenta* 嵐), *trebas* (*terbas* 暗闇), *bulrón* (*burlón* からかう), *perguntar* (*preguntar*), *frorecido* (*florecido* 錆びた), *frorido* (*florido* 花盛りの)。
- 離隔転換: *frábica* (*fábrica* 製造), *frebe* (*febre* 熱), *probe* (*pobre* 貧乏な), *blurar* (*burlar* 避ける)。

8) 語中音消失 (*síncopas*): RC から採集: *vran* (*verán* 夏)

9) 相違主義による超ガリシア語化した進展 (evolucions hipergaleguizadas por diferencialismo). *A rosa de cen follas* から採集

とくに、母音間の -d-, -l-, -n- の削除が見られる。

cristaes (cristales 結晶), veo (velo ベール), tranquiá (tranquila 静かな), suor (sudor 汗), coroa (corona 冠), veas (venas 血管), cores (colores 色), terreal (terrenal 現生の), pregoado (pregonado 言いふらした), lumiosos (luminosos 光る), ordeóu (ordenou 整頓した), resoa (resona 反響する), coroado (coronado 王位についた), abandoa (abandona 捨てる), condeados (condenados 判決を受けた)

2. 形態面 Morfoloxías における現象について

1) 語尾と接尾辞 (terminacións e sufixos)

① ラテン語の語尾 -ANUM, -ANAM, -ANOS, -ANAS については、現在ガリシアの地理的分布により異なるが、男性形は大まかに3つ、女性形は2つの体系に表すことができる。カバニージャスはガリシア西部の特徴を示す -AN を採っている。男女同形で、この図式2列目の体系である。4列目がアカデミアによる規範の表記で、書き言葉に受け入れられている。

-ANUM 男性単数	-ANAM 女性単数	-ANOS 男性複数	-ANAS 女性複数
irmao	irmá	irmaos	irmás
meu irmán	miña irmán	meus irmáns	miñas irmáns
irmá	irmá	irmaos/ irmás	irmás
irmán 兄弟	irmá 姉妹	irmáns	irmás

RF から採集: señoritas aldeáns 男女同形 (aldeán, aldeá) 村娘たち, as terras chans (as terras chás) 平らな土地。カッコ内は現行の表記

TA から採集: mañán, irmán は男女同形。カステラニスモとして cristiano (cristián), escribano (escribán)

同様なことは、次の名詞と形容詞にもみられる: VM から採集. san 健康な (男性形 san, 女性形 sá), lan 羊毛 (la), levián 軽い (男性形 levián, 女性形 leviá), 朝 mañán (mañá), リンゴ mazán (mazá). 語尾 -an で終わる形態をカステラニスモ (カステイーリャ語主義) と考えると, campana 鐘 (campá), cristiano キリスト教徒 (cristián) があげられる。

しかしながら、話し言葉のなかに共通語として martiño マトウダイ,

candelao カンテラ, chao 平らな, mao 手、などがあることから、-ano, -ana は新形成語尾と考えたい。それは、長年にわたり人々の言葉の中に入り込んでいる接尾辞 -ao を改新の規則により消失させるのではなく、失われつつある形態をガリシア語本来の形に戻して、よみがえさせている。すなわち、カバニージャスは慎重に伝統の形態を保護しようとつとめていることが窺える。

② 複数形の形態の揺れ :oscilantes da formación dos plurais

i) アクセントが最後の音節にある二音節以上の名詞と形容詞で -l で終わる語の複数形

現行の規則では animal → animais, azul → azuis となり、形態素は -is である。ラテン語 ANIMĀLĒS > animaes > animais. ラテン語 ANIMĀLĒS > animaes > animaas > animás のようにガリシア語では二通りの進展をした。母音間の -l は消失するときに、二つの母音が衝突して、二重母音にならない連続する母音、すなわちイアト hiato は、上記のように二つの進展をたどった。二重母音になる場合と、2つの母音が同化して á になるケースである。

しかしながらカバニージャスの作品を見るとさまざまな形態が確認できるので、それらをあげてみたい。RF, VM, NE, RC から採集。

- ・ **-áes/ -ues:** cristaes, raciaes, celestiaes, sideraes, imperiaes, provenzaes, azues, raciaes. 擬古主義の形態
- ・ **-ás:** currás, cristás, reás, voluntás. 俗語主義または方言形の形態
- ・ **-áis:** curráis. 現行規則の形態
- ・ **-ales:** currales, dedales, pardales, parrales, pinales, pedrugales, lanzaes, vidrales, ronseles.. カステイーリャ語化した形態
- ・ **-ales:** leiales, pasales, milleirales, sinais, trunfales. 破格的用法の形態
- ・ **-als:** currals. ロサリーア・デ・カストロが用いた形態

これらの複数形の形態は、ガリシア語のなかで生きながらえているが、カバニージャスが好んだ形態は -aes/ -ues と -ales のような俗語主義 vulgarismo、それは郷土愛 localismo であろう。それは、とりも直さずガリシア語化 galeguización を実行したものと考える。

ii) アクセントが最後の音節にある -n で終わる多音節の語の場合

現行規則では lambón 甘党の → lambóns, lacazán 怠け者の → lacazáns となるが、カバニージャスは eleccióis 選択, contribucióis 貢献, folgazás 怠惰な, bés 財産, ruís 悪い, calsóis パンツ、半ズボン, ús 一つ、のように -n が消失する形態

を時々使用している。現在でも、Ediciós Castroのように好んで使用している出版社もある。

同様に -I で終わる名詞と形容にカスティーリャ語化した形態 -les が現れている。

VM: currales (currais), dedales (dedais), paradales, parrales, oinales, pedrugales
カステラニスモの形態 longos vidrales, pinos lanzales

③ 語尾 -iño, -iña

この語尾は、ラテン語の語尾 -INUM/ -INAM が変化して、ガリシア語で進展した形態であると同時に、示小辞の形態として一般的に使われている。

- ・ラテン語からの進展 :lat. hirundīne > andoriña 燕, lat. vulg. cammūnu > camiño 道, vicīnu > veciño 隣人。
- ・示小辞 : casa > casiña 家, pequeno > pequeniño 小さい, vello > velliño 古い, mañanciña, mañanciña 早朝, froliñas 花, faroliños カンテラ。(RF から採集)

しかし、カバニージャスはこの形態をカスティーリャ語との違いを表現するために人工的につくりあげ頻繁に使用している。これを超ガリシア語主義と定義したい。() の語が規範ガリシア語の形態。NE, AT から採集。

cristaiño (cristalino 水晶のような), adiviño (adivino 予言者), diviño, diviña (divino, divina 神の), destiño (destino 運命)。

では、campesino の場合はどうであろうか。規範形 campesiño 農民、の代わりに campesino をガリシア語であると混乱しているのではなからうか？ 同義語として campesio (RC) を確認できる。これとは逆に、規範形である montaña, sinal を好意的に態々 montana, sinal と記している例もある。

ガリシア語の特徴を示すこの語尾をカバニージャスは語末と語中に適用した例がある。

O Mariscal (1926) という戯曲作品のなかに見られる。

brigantiño (brigantino 悪党), resiñado (resinado あきらめた), iñorado (ignorado 無知の), impoñente (imponente 堂々とした), vergoñante (vergonzante 恥入った), vergoñento 恥ずべき, domiñante (dominante 支配する), ruiñoso (ruinoso 荒廃した)。

この語尾について、社会言語学的観点から考察すると、現代ガリシア語で「ガソリン」を意味する gasoliña という語を時々耳にすることがある。これは gasolina が正しいのであるが、人々はガリシア語の特徴を示す接尾辞 -iño

を取り入れて創作した語である。超ガリシア語化である。さらにあげると、*medicina* (*medicina*, 又は *mencina* 薬), *cocaína* (*cocaína* コカイン), *ruína* (*ruina* 廃墟), *xelatiña* (*xelatina* ゼリー) などの借用語によく使われるようだ。

④ 語尾の形態 *-eiro*, *-eira*, *-ento*, *-ente*, *-ito* を特に好む傾向がある。

例えば、*triste* はカスティーリャ語とガリシア語に存在する「悲しい」という意味の共通語であるが、カバニージャスはガリシア語化を感じさせる形態、すなわち語尾 *-eiro* を付加して *tristeiro* としてガリシア語の特色を表している。

triste/ tristeiro, milagroso/ milagreiro, treidor/treioeiro, cabeza/ cabeceira,

farto/ farturento, verde/ verdecente, erguido/ ergueito, envolto/ envolveito.

このようなさまざまな語尾を付加する言葉遊びは、詩のなかで豊かな味わいを醸し出すと思われる。こうしたことは言語学的な操作ではなく、カバニージャスは一人の詩人として *galego, soio galego!* (ガリシア人、私はガリシア人である!) という姿勢を貫いた民族の詩人と呼ばれる所以であろう。

⑤ 接尾辞 *-ade*, *-ude* の語尾音削除 (*apócope*)

中世ガリシア文学では頻繁に表れているこの接尾辞は、カバニージャスの作品では多くは使われていない。カスティーリャ語の影響を受けてガリシア語の伝統的な *-ade*, *-ude* の語尾 *-de* の削除により *-a* となった。カバニージャスは伝統的な形態を自己流で復活させたカステラニスモまたは俗語主義と考える。カッコ内の語は規範ガリシア語とカスティーリャ語。

soedá (*soidade, soledad* 孤独), *edás* (*idade, edad* 年), *Hirmandás* (*Irmandade, Hermandad* 親密), *escravitú* (*escravitude, esclavitud* 奴隷). *NE* から採集。

カバニージャスがこの形態を好んで選択した理由を探ると、とくに19世紀のガリシアの詩人ポンダル *Pondal*, ロサリーア *Rosalía de Castro* によって使われた文学的な形式であることに因る。

⑥ ラテン語の接尾辞 *-BILLIS* はガリシア語ではどのように使われたか?

lat. possibile は、規範ガリシア語では *posible/ posibel* の2つの形態が認められているが、カバニージャスはどうかであったのか。この語尾には歴史的に統一された伝統的な形態はなく、カスティーリャ語の形態に追従して使われているようだ。しかし、ガリシアの人々の話し言葉では、*posible* は唇音 *b* と *l* の音の間で緩んだ *-e-* を感じて *posibele* のように発音して、そのように聞こえる。カバニージャスの作品 (*RC, VM*) の中では *inasaltanbre* 強盗できない,

inconsolable 慰めることのできない, innobre 下品な, noble 気高い, をあげることができる。Carréの辞書に posíbele が見出し語にあり、Irmandadesの語彙集に amábelの記載がある。

2) 組子音の転位: 語頭の bl-, cl-, fl-, gl-, pl- と語中の -bl-, -cl-, -fl-, -pl- において、-l- が -r- 転位する。この現象は際立った特徴と言える。カバニージャスは、カスティーリャ語から人工的形態を新たに創りあげ、その違いを示そうと試みた。その方法はシステムティックに l > r に変化させた。ある種の俗語主義の特徴と言えるが、些か問題があるといえる。

つまり plático 説教 → práctico にすると、práctico 実際のの、との混同が生じる。そこでカバニージャスは praicticar のように母音 -i- を挿入している。NE, VM, TA から採集

語頭: craro, crara (claro, clara), frorecida (florecida), gloria (gloria), prato (plato) tempro (templo), craridá (claridade), fror (flor), froxo (floxoxo), praticando (platicando), prántase (plántase), cravo (clavo), brason (blasón).

語中: compreta (completa), copra (copla), espriacar (explicar), supricante (suplicante), bibrioteca (biblioteca), incrinada (inclinada), inexpricabre (inexplicable), refrexar (reflexar), tembraba (temblaba), temprado (templado)

3) 名詞の性のカステラニスモ: o xénero do castelanism

カスティーリャ語の名詞の性をガリシア語に使用する例がある。

()の語はカスティーリャ語

Cabanillas NE, AR, VM	Normativo Oficial	日本語訳
o aguia (el águila)	a aguia	鷲
as señales (las señales)	os sinais	印
as meles (las mieles)	os meles	蜜
o viaxe (el viaje)	a viaxe	旅
o linguaxe (el lenguaje)	a linguaxe	言葉
os arbres (los árboles)	as árbores	木
as costumes (las costumbres)	os costumes	習慣
as cumes (las cumbres)	os cumes	頂上
os dores (los dolores)	as dores	痛み

o ramaxe (el ramaje)	a ramaxe	枝
a sangre (la sangre)	o sangue	血
o vasallaxe (el vasallaje)	a vasalaxe	家臣、従属

カバニージャスは名詞の性について、ガリシア語の規則に則り o camiño, a imaxe 像, a ponte 橋, のように正しく使用しているが、ここに挙げた語においてはカステラニスモ、すなわちカスティーリャ語と同じの名詞の性を使っている。

os arbres (as árbores), as costumes (os costumes), as cumes (os cumes), os dores (as dores), o ramaxe (a ramaxe), a sangre (o sanue), o vasallaxe (a vasalaxe), o viaxe (a viaxe).

4) 前置詞の形態

- ・ 規範の形態 *ata*~ まで、に対して *até*, *atá*, *astra* の形態が確認されるが、*RC*, *RF* には *até* が多く使われている。*Carré* の辞書には *ata*, *até*, *hastra*, *deica* が記載あり、*Irmandades* の語彙集には *ata*, *fasta* (ant.), *deica*, *fascas* の記述がある。*Da Terra asoballada* の初版を見ると、*astra* の形態が確認できるが、第二版には *até* と修正している。*astra* の形態を俗語主義カステラニスモと判断して、その後、第二版ではポルトガル語の形態 *até* に修正したと思われる。
- ・ 規範の形態 *entre*~ の間に、に対して *antre* の形態が確認できる。*Irmandades* の語彙集に *antre*, *ontre* (ant.) が記載されている。*Carré* の辞書を見ると、*antre* の見出しはあるが *entre* はない。
- ・ 規範の形態 *sen*~ なしに、この語については *Irmandades* の語彙集は *sen*, *sin* の両方をあげている。カバニージャスは *sin* の形態を使用している。一つ注意することは、前置詞 *sin* に定冠詞または弱形代名詞が続くとき、*sin o ve* それを見ずに、*sin as ovellas* 羊なしに、のような場合はある種の言語的反映で、話者の自主的な形態に表記上変化する。すなわち、*si no ver*, *si nas ovellas* となることである。前置詞 *sin* の語尾 *-n* が弱形代名詞 *o*, 定冠詞 *as* と接合することである。現行の表記法では、このような表記はない。カバニージャスの作品の初版には接合形は記されているが、近年刊行された全集は規範形式を採用している。

5) 接続詞について

- ・ *TA* 初版 (1916) では、繫辞の *i o lume* そして火は、と記載されているが、第二版 (1926) では *e o lume* と変更している。Os foguetes e as bombas … 花火と爆薬 (*RF*)
- ・ 条件の接続詞は *si* を使い、カステラニスモである。規範形は *se* である。como si entrara… まるで入るかのように (*RF*)
- ・ 逆接の接続詞: *mais, pero* が区別なく使われている。(*RF*)

6) 動詞について

① 最も顕著な特徴は、-ir 動詞の直説法完了過去三人称単数形の活用語尾である。() は規範ガリシア語の形態。ガリシア西部地域では、partir の活用形は parteu (partiu) になる方言形態があることから、カバニージャスも fuxir の直説法完了過去三人称単数形に fuxeu, fuxéu (*TA*) と記している。さらに *VM* のなかでは、次のような例がある。

dirixeu (dirixir; dirixiu), diverteuse (divertirse; divertiuse), fuxeu (fuxir; fuxiu), pideu (pedir; pediu), sigueu (seguir; seguiau), veu (vir; viu).

② カステラニスモの使用: comenza 始める, comenzo 開始 (*RF, RC*)

lat. vulg.*cominitiaere がロマンス語に広がり cast. comenzar, cat. comensar, port. começar, pr. comensar, fr. commencer, it. cominciare のようになったが、ポルトガル語とガリシア語では -n- が消失した。

③ caír, traír, saír の動詞について (*RF*) から採集

- ・ caer 落ちる、直説法現在形の活用は caio, caes, cae, caemos, caedes, caen が規範形であるが、カバニージャスは *RF* のなかで、ガリシア南部で使われる方言形とされる caír を使用している。規範形は caer (<lat. cadere) である。さらに *RF* のなかで直説法現在の活用形 cai, caimos, caien, 現在分詞 caíndo を見つけることができる。語尾 -aer, -oer で終わる動詞の第二活用は、直説法現在形で、語幹と語尾の間に母音 -i- が挿入する。caer, doer は同じ動詞形態の変化である。*VM* に cai (cae), doi (doe) の使用がある。
- ・ traer 持ってくるの直説法現在形の活用は: traio, traes, trae, traemos, traedes, traen が規範形であるが、ポンテベドラ県の一部では traír: traímos, traídes, traía となり、カバニージャス作品にも trai, traíen を確認できる。(*RF*)
- ・ saír 出かけるの直説法現在形は saio, saes, sae, saímos, saídes, saen が規範形

であるが、カバニージャスの作品には *sai, saien* が現れる。命令形に *sal, sai* がある。(RF)

④ 揺れている動詞

- ・ *ser* (～である) の接続法現在の活用形: *sea, seia, seña* などがある。規範形は *sexa* である。地域と作家により揺れがあるが、カバニージャスは *seia* を好んで使用している。
- ・ *estar* (～いる、ある) の接続法現在形は *esteá* が規範形であり、ガリシアの多くの地域で使用されているが、*esteia, esteña* のような方言形もあり、地域により揺れている。
- ・ *dar* (与える) の直説法完了過去三人称単数形にカバニージャスは *dou* を使用している。規範形は *deu* である。接続法現在形に *dea, día, deia* などの方言形がある。*dóu unha dada* 失神させた。(RF)
- ・ *poñer, pór* (置く) の2つの形態が規範形で認められている。ポンテベドラ県南部では *poer* という語中音 *ñ* が消失する方言形態があり、カバニージャスも時々使用している。
- ・ *descer, decer* の異形態が見られる(規範形は *descender* 降りる)。これら2つの形態はアルカイスモとされている。同様に *nacer* (生まれる、規範形は *nacer*) がある。*nacimiento* (規範形 *nacemento*)。「降りる」を意味する *decer* は、「言う」を意味する方言形 *decer* (規範形 *dicir*, 方言形 *decir, dicer, decer*) と同音異義語である。(RF)
- ・ *conezo, conecer* (規範形 *coñecer* 知るの直説法現在形一人称単数 *coñezo*)。カステイーリャ語 *conocer* から派生したカステラニスモ。活用形 *conezo* はカステイーリャ語とガリシア語の混種語で、*coñezco* も見られる。*conoscer* はアルカイスモ。
- ・ *deteñense* (立ち止まる) はカステイーリャ語 *detenerse* から造語された超ガリシア語。(RF)
- ・ RF のなかで *soupeira* を使用しているが、規範形は *soubese* (カステイーリャ語 *supiera*) であるように、語根のみカステイーリャ語化した形態である。*Ai! Si soupeira...!* この形態は、ガリシア語では直説法大過去形であるが、接続法未完了過去の意味として使われている場合がある。伝承歌のなかに、その用例を見つけることができる: *Si soupeira que ti viras C.P.G.174, Si souperan os casados C.P.G.738 (Cancioneiro popular garego, 1983)*
- ・ 新語 *sorpresamos* 驚かす、「驚かす」を意味する他動詞の規範形は

sorprendemos であるが、カバニージャスは名詞の *sorpresa* から造語して *sorpresamos* を創り上げた。

- *decir, decindo*「言う」の規範形は不定詞 *dicir*, 現在分詞 *dicindo* であるが、作品のなかでカバニージャスはカステラニスモを使用している: *van decindo (RF)*, *voucho decir (RC)*。
- *oir/ouvir*「聞く」の場合は複雑な形態をとる

規範ガリシア語では *oir* (<lat. *audire*) が認められている形態であるが、*ouvir* の形態は方言形の異形態でポンテベドラ県モンダリス、ポンテアレスとポルトガル国境地帯の形態で、ポルトガル語主義かつ相違主義により書き言葉で使われている。現行の規範ガリシア語では話し言葉でも *oir* である。いくつかのバリエーションがあるのは、ラテン語 *audire* から進展し、中世ガリシア語では *ouir* のように母音が3つ続くため発音しにくいことから変化したものであるとされる。2つの理由が考えられる、*ouvir* のように子音の増加によりポルトガル語化して生じた形態。同様なことはガリシア語の方言形に現れる *ouguir* である。もう1つは中間母音が削除された理由による。

ouvir はポンテベドラ県モンダリスで使われる方言形であることから、カバニージャスは *RF, RC* の初版では *Ouvimos a misa maor* と表したが、その後の版で *oímos* に変更されている。*ouvir, ouvido* は方言形またはポルトガル語主義と考えられていたが、アカデミアの辞書 1990 には *ouvir* の項目は消えてしまい、*oir* が規範形となった。アカデミア語彙集 *Volga* には同意語として *ouvir* をあげているし、偽ガリシア語として引用している辞書もある。

カバニージャスは *ouhir, ouvir* さらに *ousa* を表している。 *Levaíme convosco, Condes, onde nono ousa ni vexa*. (私をお前たちと共にコンデスに連れて行き給え、そこは聞いたこともない見たこともない土地)。この *ousa* の不定詞は *ousar* であろうが、現代語と意味が一致しない。カバニージャスは「聞く」という意味で使っているが、現代語では「敢えて…する」という意味がある。おそらく *ouza* からセセオにより *ousa* と類推的に創りあげられたか、または *audiam* から派生したオリジナルな形態であろう。一方 *ouza, ouzas* と *ouçan* という形態は中世ガリシア・ポルトガル語で書かれた *Cancioneiro da Ajuda*, 7246 にあらわれている。直説法現在一人称単数形 *ouço, ouzo* さらに三人称複数形に *ouçan* とある。(Carolina Michaëlis de Vasconcellos: *Glossario do Cancioneiro da Ajuda*. Lisboa, 1922.) デジタル版。

- ・ *bendecir/benzoar* カトリックで「祝福する」を意味する他動詞に揺れが見られる。名詞形は *bendición* 複数形 *bendicións/benzón* 複数形 *benzoas* であり、過去分詞は *bendito* である。カバニージャスの作品にはカステラニスモの *bendecir* が使われているが、とくに 1926 年頃の作品 *NE, TA, RF* には *benzoa* が好んで使われている。アルカイスモまたはポルトガル語 *benção* に対応している。規範形は *bendecir, bendito, bendición* である。また *benzón* には「感謝」の意味で使われる地域がある。

Ⅲ 統語面 *sintaxe* における現象

1. 迂言形式「*ir + (a) + 不定詞*」の構造

この構造はカステリーリャ語の未来を表す迂言形式で、ガリシア語学ではカステラニスモである。ガリシア翰林院 *Real Academia Galega* の辞書及び文法書を見ると、ガリシア語では前置詞の *a* を使わずに「*ir + 不定詞*」の形式を使い、未来または進行を表現するために頻繁に使われる。では、カバニージャスがカステリーリャ語の構造を使用したのはどのようなことなのか、見てみたい。() が規範ガリシア語の表現形式。

Da Terra asoballada から採集した用例は、***vai a falar*** 話すつもりだ (*vai falar*) , ***ir a falar*** 話そうとする (*ir falar*) , ***vanse a cumprir*** 実現されるだろう (*vanse cumprir*) .

これらを単純にガリシア語におけるカステラニスモと考えたいが、Freixeiro Mato (2000:440) によると、ガリシア語では、未来または切迫した状態の迂言形式「*ir+ 不定詞*」と未完了の aspekto を表す迂言形式「*ir+a+ 不定詞*」が存在して、両者は区別されるものであると述べている。例えば、***vou falar*** 話そう、***ía ler*** 読むつもりだった、***ía a ler*** *cando se produciu o accidente* 事故が起きた時、読書していた。こう考えると、未来を表す迂言法はカステリーリャ語の干渉により、近い未来の表現として迂言法の形式要素として前置詞 *a* の出現を可能にさせたと考える。カステラニスモの形式は、アカデミア (RAG) によると不正確な用法だと言われるが、話し言葉では頻繁に現れ、同時に書き言葉にも 19 世紀から常態化していった。

では、カバニージャスの作品 *As Romaxes da Franqueira* から採集した次の例文はどうだろうか。O señor abade ***foi a buscar***. 修道院長は探しに行った(又は、修道院長は探した)、A nai ***foi a servir*** ó Rei. 母は王様に仕えるために出かけた(又は、母は王様に仕えた)。この文は、動詞 *ir* はいずれも直説法完

了過去三人称単数形 *foi* であることから、迂言法ではないと判断したい。しかし、Santamarina (1974:147)によると、**Foron caer a un pozo d'auga.** の文では、*foron* は直説法完了過去の時制であり偶発的に生じたことで、この形式の文を書き換えると、*Deuse o caso de que caeron nun pozo d' auga.* 彼らはとうとう水溜に落ちた、という意味になることを説明している。**Foron a beber.** の場合は、彼らは飲みに行ったのか、それとも、彼らは飲んだ、の両方が考えられるが、迂言法でないとすれば、彼らは水を飲みに行った、である。もうひとつカバニージャスの作品から用例をあげると *cinguiron as espadas e foron cabalgar.* (NE) 迂言法の形式は、直説法完了過去形+不定詞であり、文意は、彼らは剣を腰につけて馬に乗った、であるから迂言法ではない。

しかしながら、*Erguinme de novo e fun pecha-la porta do cuarto.* 私は再び起きて、部屋のドアを閉めた (Alvarez1986:405)。この文を動詞の複合形式において *ir* は運動の概念を示すだけにすぎないと説明している。一方、*Cando fun acende-lo ordenador decateime de que non había luz.* コンピュータのスイッチを入れたとき、灯りがついてないのに気が付いた (Alvarez 2002:364)。この文では、切迫した状態とすぐ後で起こることを区別することは難しいとしている。助動詞 *ir* が完了過去および大過去形で使われるのはそれほど頻繁ではないと説明している。

ロサリーア・デ・カストロ博物館のブログ (2021.2.24) に *iniciamos … que a familia Castro-Murguía fose vivir á cidade herculina.* (カストロ-ムルギーア家族がヘラクレスの町に住めるように…我々は着手した) を見つけることができた。尚 *fose* は接続法未完了過去形であるから、迂言法は可能と考える。

A rosa de cen follas から、この迂言法の用例を見るとガリシア語の形式とカステラニスモの形式が混在しているのがわかる。**voucho decir** お前にそのことを言おう (XXIX); *Non a queiras, corazón, que che vai custar a vida.* 彼女を好きになるな、心よ、お前の人生の重荷になるから (XXX); **que vas cair!** お前は命を落としそうだから (XXX); *Xa sei que vas a vel-a!* お前が彼女に会うとするのはすでに知っている (X); *Que lle vas a facer?* お前は彼に何をするつもりか? (IX); **vaise o tempo a fuxir** 時はすぎ去るだろう (XV)。

ガリシアの伝承歌を集めた Ramón Cabanillas, *Cancioneiro Popular Galego* 137 に次のような一節がある。**Funme botar a dormir a pé da agua** 私は水の傍で眠りだした。この用例は、*funme botar* と *botar a dormir* の2つの要素が連鎖している複合迂言形式である。

最後に中世ガリシア語からその用例を調べると、Larson (2019:128)に次のようにある。動詞 *ir* + 不定詞の迂言法は、*ir* が現在における未来性、または、過去における運動の概念を表すことができるとしている。

《*E por ela vou trobar*》そして聖母のために詩作しよう。《*Perden seu sén/ aqueles que me van a demandar/ quen é mia senhor*》誰が我が聖母であるか私に訊ねようとする者たちは言葉を失う。《*E ides-mi ora defender/ que vos non veja*》貴方様にお会いすることを今は禁ぜられよう。《*Fui buscar/ consell' e non o pud' aver*》私は助言を求めに行った、でもそれを見つけることはできなかった。

『聖母マリア頌歌集』にも用例を見つけることができる：《*E pois entrou Tolosa, foi logo fillar pousada*》CMS, 175 そしてトローザの町に入った、すぐに宿屋を探しに行った。(Alfonso X: *Cantigas de Santa Maria*. II. Edición de Walter Mettmann, Madrid, Castalia, 1988.)

2. 弱形代名詞の位置

現代ガリシア文法の規則において、弱形代名詞の位置は肯定文では、*Premiáronme cunha viaxe*. 私はご褒美に旅行をさせてもらった。このように、*me* は動詞に後置して接合される。否定語を示す語の後、接続詞 *que* に導かれる従属節の中では、弱形代名詞は動詞より前に置かれる：*Non me atrevo a chamar*. 私は呼びかける勇気がない。*Dixo que te avisaría*. 彼は君に知らせるだろうと言った。

Da Terra asoballada のなかで、アカデミアの規範にそぐわない例があるので、検討してみたい。*Lles dou como contesta* (規範形式 *deulles como contesta* 彼らに返答した)；*Llesolveu as costas* (規範形式 *volveulles as costas* 彼らを背負って戻った)に見られる *lles* は、本来ならばカッコ内のように動詞に後置して一語として表記されるものであるが、カバニージャスは強調の意味を出して、このように使用したものなのか？*Lugrís* の文法書を見ると、この誤用と思われる用法は *resulta de moi mal gusto dicer nestes casos* (話し方の悪趣味によって生じた)であると記している。さらに、カステラニスモはガリシア語の語感に不快感を与える、とも記している。(Lugrís 1921:87)

次に、*As Romaxs da Franqueira* の中から *Pido para él que non me deixa ganalo!*; e moitas máis de que *me non lembro, que chegan a bo paso por corredoiras e vieiros abertos entre terras labrantías*. の用例を見つけることができる。この文で代名詞 *me* は従属節かつ否定文で使われているが、語順は *que non me*

lembro が正しいのではないかと考えたが、Lugris (1921:88)を見ると、**Que me non queiras; o non vin; non se foi nin pensa en se marchar.** の例があることから、否定文では弱形代名詞は否定語の non に先行することがわかる。これは、村人がよく使う形式でガリシア語の真の有り様にもっとも一致している、と記している。さらに多くの作家たちが **que non me queira; non-o vin; pensa en non marcharse.** の例もある。

同じような事例が Cantar do pobo (民謡) から見つけることができる。Xa **me non queren as nenas/ Porque vou acabadiño.** さらに、カバニージャス編 Ramón Cabanillas (ed.) : *Cancioneiro Popular Galego.* (C.P.G.) Vigo, Galaxia, 1983. のなかに、**agora por te non vere/ ando polos arroseos.** (610), **agora por te non ver/ tódalas teño pechadas** (649) のように、収集された伝承歌に弱形代名詞が否定語 non より先に置かれている例がある。

このような事例から判断すると、ガリシアの民謡や伝承歌に弱形代名詞の位置が否定語より先行する例は俗語主義または破格用法と考え、ガリシアの郷土愛に豊かなカバニージャスも使用したものと思われる。もとをたどれば、中世ガリシア語による *Cancioneiros* の時代に書かれた o non vin のように代名詞は否定語に先行する事例なのであろう。

- ・ 不正確な代名詞の位置について、*A rosa de cen follas* の作品に散見する例から、検討してみたい。A do que un día **foise** c-os seus dores sobre as ondas do mar! (XXIX) この文は、従属節のなかで、かつ不定語 un día が先行して foise とあるが、アカデミアの規範に従うと un día se foi c-os dores となるのが正しいと思われる。

一方、Si co-a folla da traición, un día **me** deixas morto. (XXXI) は、アカデミアの規範に従う位置である。この2つの文は、副詞句 un día が先行していて、この副詞句を不定語と考えると、弱形代名詞はアカデミアの規範に従うと動詞に後置するのが正しいとされるが、動詞の前に現れて強調の意味を持たせることがあるようだ。すると、両者とも正しいことになる。

3. 前置詞 en 冗語法について

- ・ **en** nos ollos azúes unha sagra visión のなかで、en nos (en+os) と記してしているが、en は重複であり、冗語法である。
- ・ 関係副詞 onde の前に en の使用：

En onde tí pos ollos — **en** onde tí pos mans; (VM) ou unha man atrevida que fura máis da conta **en** onde debe. (RF) parolar co ese futricas; **en** onde queimas o lume

(C.P.G.) 609

- ・ 関係代名詞 *que* と前置詞 *en*:

Cara ó palleiro **en que** o cucho …; se aveciña **en que** o rei ten de alzala … (AE)
 この場合は *o palleiro no que; se aveciña na que o rei …*, という形式が可能であり、さらには *onde* も可能であると思うが、文体的な効果を狙ったものか?

4. 代名動詞 (再帰動詞) の誤用: カステラニスモ

A rosa de cen follas のなかで *morréndome* とある。ガリシア語では *morrer* は自動詞として扱い *morrerse* は誤用である。なぜ、誤用なのか?

別の文を見ると、*vai morrendo; en que vivo morrendo* のように書いているが、*dame o doce desespero/ de non saber si me quere/ morréndome do que a quero!* の詩だけ、どうして誤用をしたのか疑問が残る? よく考えると、八音節にそろえるために敢えて *me* を入れたのかという考えが湧く。

もう一つ *crebábase en albores a luz do novo día* 新しい日の光で夜が明けようとした、

crebábase はカステイーリャ語の *quedarse* → *se quedaba* である。自動詞として *crebar* はガリシア語では使われるが、カステイーリャ語からの模倣なのか?

5. 比較の構文のカステラニスモ

A rosa de cen follas のなかで *o mesmo que ela* とあるが、人称代名詞を比較の対象とするとき、ガリシア語では *Xan é máis alto ca min./ Fala igual ca ti.* のように比較語の *ca* が使われるのが一般的である。カステイーリャ語の *misimo que* を借用したカステラニスモなのか?

Freixeiro Mato (2000:592) によると、文学作品の中で *que* を使用することは珍しくはないと記している。その例に *e vostede sábeo o mesmo que eu.* をあげている。

6. 存在動詞 *haber* の用法

カバニージャスの劇作品に、次のような文がある: *mala a houberon os cristianos.* 悪いことにキリスト教徒たちがそれを持っていた。この *houberon* は *haber* の直説法完了過去三人称複数形である。存在動詞としての *haber* は非人称形であるから *houbo* が正しいガリシア語の用法であると考えが、*estar* または *permanecer* の意味で使うとき、特定の主語があるときには三人称複数形が可能なのか? 主語がカステイーリャ人でなくキリスト教徒という

一般的な使用であることに因るものなのか？もう一つ、… treméu o cabaleiro e houbo gran pavor. 騎士は震えて、ひどく怖がった。この文も tuvo pavor が一般的な表現に思えるが……。これらは、中世ガリシア語の叙事詩の特有な構造を近代詩のなかで芸術的かつ文学的な表現を示していると考えたい。その裏付けとなるために Larson (2019:115) を見ると、中世ガリシアの抒情詩人 Martin Moxa の用例として《Non han homen que as defenda》(それを守る兵士がいない)のように haber の直説法現在三人称複数形があらわれている。

IV 語彙 Léxico について

カバニージャスが作品のなかで使われた語彙を分類するにあたり Iglesia Alvariño (1959), Fernández Rei (1999) および Ramón Pena (2009) の研究を参考に次のように分類する。() の語は規範形

1. 偽ガリシア語主義または超純粋主義の語 (pseudogaleguismo ou hiperenxebismo) カスティーリャ語とは違うことを表すために、相違主義者として執拗に作品のなかで規範形とは異なるかなりの数の語彙を創り上げた。

azuado (azulado), brillante (brillante), montana (montaña), primaveira (primavera), tranquí (tranquilo), brillo (brillo), hourizonte (horizonte), inconsolable (inconsolable, inmovre (inmóvil), soídos (sons), outo (alto), abandoa (abandona), brilar (brillar).

2. カステラニスモとカスティーリャ語化したガリシア語 (castelanismo e castrapismos) ことばの純粋化を目指した方法として、時々カティーリャ語主義を取り入れた。

auga (auga), antoxo (antollo), cuneta (foxo), cuaxada (callada), Dios (Deus), isla (illa), parexa (parella), sin (sen), selo (selo), carretera (estrada), lexos (lonxe), palo (pau), polvorento (poeirento), ventana (ventá), vereda (verea), dioses (Deuses), adiós (adeus), mortaxa (mortalla), Reises (Reis), conoce (coñece), pino (piñeiro), piniño (piñeirinho), traicioneira (traizoeira), medoso (medorento), decindo (dicindo), capilla (capela), soído (son), pulpo (polbo).

カバニージャスが使う語で時々現れるのが campana 教会の鐘、である。この語はカスティーリャ語と同音同義語である。規範形は campá であるが、*As romaxes da Franqueira* では sinos を使っている。明らかに sino はポルトガル

語主義である。アカデミアはこの語を拒否しているが、一部の作家たちはこの語を相違主義者の好みとして使用している。カバニージャも相違主義者である。Carréの辞書、Irmandadesの語彙集には *campana*, *campá*, *sino* は同意語として掲載させている。ガリシア語研究所の調査によると *sino* は *badal* または *badalo* と同意語であり、*campá* とは違うとしている。しかし、いくつかの辞書では、この2つの語を同意語として扱っている。*sino* は *campá* の内部に *badalo* 鐘の舌、があり、その棒状の舌で叩くか、または外から金槌で叩いて音を出す仕組みになっている。現代ガリシア語では *campana* または *campá* が知られている。一方、ポルトガル語では *sino* が一般的である。そして *sino* はガリシア語に不正確な語として入った。一方では新たな語が創り上げられた：*campañña*, *campanario*, *campaneiro*, *acampanar* など。現代では *campá* が一般的ではあるが、限定された範囲で *sino* が使われる。文学的には、ロサリーアの *Campanas de Bastabales*, ポンダルの *Campana de Anllóns* がすでに知られていた。こうしたことから、カバニージャスは抒情的な意味合いをこめて、平凡なイメージの *campá* よりもポルトガル語の形態 *sino* を使用したと考える。

3. 俗語主義の語 (vulgarismo)

文学のなかにおけるガリシア語の構築のために、古いガリシア語に語彙をもとめたアルカイスモ。他方ではカスティーリャ語化したガリシア語ではなく大衆のガリシア語に語彙を求めた俗語主義。

antre (*entre*), *astra* (*ata*), *atreverse* (*atreverse*), *esquibir* (*escribir*), *coadra* (*cuadra*), *hestórea* (*historia*), *médeo* (*medio*), *múseca* (*música*), *número* (*número*), *tromenta* (*tormenta-treboada*), *estúdeo* (*estudo*), *maestro* (*mestre*), *léngua* (*lingua*), *probe* (*pobrte*), *siñores* (*señores*), *socedia* (*sociedade*), *instante* (*intre*), *profundo* (*profundo*).

前置詞 *astra* について考えてみると、(h) *asta* または挿入音 -r- の形態の *astra* は、カスティーリャ語の *hasta* の俗語であり方言形の異形態である。長い年月の間に揺れがあり、結果的に中世ガリシア語の *ata* の形態を選ぶことになった。口語ガリシア語で今日頻繁に使われる *asta* はカステラニスモであり、*até* はポルトガル語主義である。カバニージャスは作品の中では *até* を好んで使用している。同意語に *deica* があり、口語で「さようなら」は *deica logo* が使われる。*ata logo* に同じ。

名詞の *instante/intre/momento* は、類義語であるが、使い方は異なる：*Por un*

intre parecía que ía a caer. 一瞬の間落ちそうだと思えた。o momento histórico do fascismo. ファシズムの歴史的瞬間。

4. 擬古主義アルカイスモの語 (arcaísmo)

中世ガリシア語で使われたアルカイスモの語をかなり取り入れた。

Castela, ouvir, remir, moesteiro, cabeçaas, vontade, século, nascimento, eirexa, outeiro, coroa, moimenta, cibdade, outo, azas, chama, pregar/pregador, benzoar, pobo, Deus, chaga, belido, raíña, segredo, antigo, verbas antigas, o pobo de outras edás, vello campanario, Foi un vello xardín, Vellas cepa, antigo acento, valo vello, frido, vello Simbad, tempo vello, oureiro velliño.

形容詞「古い」意味する vello と antigo を作品のなかで巧みに使用している。また、「歎願」を意味する規範形は prego であり、同意語に rogo, súplica がある。しかし、カバニージャスはこのアルカイスモの語を避けて、二重母音化した同義の priego に愛着を感じて使用している。

カバニージャスは、神を表すことばに Deus と同様に Dios を用いている。教会用語はカステラニスモが多く使われていたが、1965年バチカン宗教会議は典礼とミサにガリシア語の使用を認めると、徐々に宗教用語にガリシア語が復活していった。Dios は明らかにカステラニスモであるが、現代では古い形式の Deus がよみがえった。

アルカイスモの語彙であるが、音声的なアルカイスモについて区分する。

- (ア) 語中の -d-, -l-, -n- を削除 : cristaes, aínas, veo, tranquio, suor, coroa, veas, cores, terreal, pregoado, luminoso, oedenou, resoas coroado, abandoa.
- (イ) ラテン語の語尾 -inu の進展の結果としてガリシア語に生じた形態 -iño を語尾、語中に取り入れた。
 - ・ destiño, diviño, bergantiño, resiñado, iñorado, imponente, vergoñante
 - ・ montaña (montana), sinal (sinal)
- (ウ) 語尾の形態 -eiro, -eira, -ento, -ente, -ito を特に好む傾向がある。

triste/ tristeiro, milagroso/ milagreiro, pezoñento, pezoñoso, farto/ farturento, verde/ verdecento, treidor/ treizeiro, cabeza/ cabeceira, erguido/ ergueito, envolto/ envolteito, recio rexo,
- (エ) 二重母音の回復 : -oi-, -ou- にして使用
 - ・ baloira, corredeira choiva, roibo, noiva, doirar, aoirado.

choiva, roibo は現在方言形とされている。規範形は chuvia, rubio で

ある。古形 *noiva* について記すと、この語はカステラニスモとして *novia* が使われるが、ガリシア語では *noiva* は結婚している人、これから結婚する人、または結婚したばかりの人を表し、カステイーリャ語で言うところの恋愛関係にある人は意味しない。では、ガリシア語で恋愛関係にある人かというと *moza* (男性形 *mozo*) である。

・ *ouro, dourado, outo, outura, ourizante, adoura, louzano, hourizante.*

outo について記すと、この語は *alto* 「高い」の超ガリシア語または相違主義の語である。ラテン *altum* が進展して、*alto* になったわけであるが、教養主義者の反動として *outo* が使われ、派生語に *outeiro* がある。地名に *Montouto, Penouta* などがある。

hourizante, ourizante は *horizonte* の超修正相違主義の語である。

5. 創作による相違主義としての創造語 (*diferencialismo creación de palabra*) *frorir, sorpresamos, inqueda, deteñerse.*

・ 「驚く」を意味する *sorpresar* は、*sorprender* または方言形の *surprender* であり、名詞 *sorpresa* から創られて新造語である。

6. 新語の使用ネオロシスモ (*neoloxismo*): ポルトガル語にもとめた語彙 *nascer, herois, escintilantes, azas, noivas, sinos, sineiros, ronchedos, verbas, rendoas, percorrer, alén, até, ollos pechos, neste intre é que olla.*

新語と破格用法は相反するものであるが、これらの使用は再ガリシア語化につながり自由詩の実行により新語の使用は、純粹に文体的効果をねらったものである。

7. 共通形態と改新形態の共存

mirar/mirada → *ollar/ ollada*, *calor* → *ardentía* 暑さ, *ventá* → *fenestra/ fiestra* 窓, *sobre/sobor de* → *en col de* の上に, *fender/ abrir* → *lañar* 割る、裂く, *doído/ delorido* → *doente* 痛む, *labio* → *beizo* 唇, *berro/grito* → *brado* 叫び。

・ 「見る」を意味する *mirar* は中世から使われる形態であるが、同意の *ollar* には限定された意味で「見張る」という語義があることから文体的効果を表したと考える。

・ 「暑さ」を表す *ardentía* は夏の太陽の勢い、すなわち灼熱の暑さを意味している。

・ 「~の上に」を表す *sobre, sóbor* が一般的に使用される前置詞であるが、*en*

col de は今日では地方語として使われる方言形態である。前置詞句 encol de~ を「~に関して」の意味で使用すると誤用であり、アカデミアは「~に関して」の意味で使うときは acerca de を薦めている。

- ・ brado, bradar はとくに雌牛の叫び声を表す。
- ・ beizo はもともと牛馬の唇を指すが、デフォルメ化されて人間の唇も示す。
- ・ doente は恐水病の人を意味するが、激しい暴風雨に苛まれた人に比喩的に使われる。

カバニージャスはカスティーリャ語の同義語の共通形態を使う代わりに、外見上ガリシア語の形態を使用するように努めている。それはことばの再ガリシア語化への熱意からであろう。

ここで、一つ語彙の説明をしておきたい。

As romaxes da Franqueira に como os grans desbullados dunha mazorca (トウモロコシの穂からとった粒のように) とある mazorca という語が現れる。1「亜麻の一握り」、2「トウモロコシの穂」という意味らしい。カスティーリャ語でも mazorca トウモロコシなどの雌穂を指すようだ。ガリシア語ではバリエーションがあり mazaroca, mazorga, mazaruca, mazorca などがある。アラビア語起源 masura と roca が交錯してできた語である。カバニージャスは作品のなかで mazorca を使用している。ガリシア語の mazaroca ではなく、カステラニスモとしての mazorca である。mazorca は文意のほかに植物のありふれた名前をほめかしている。すなわち、亜麻の繊維くずから mazarocas を比喩的に思い起こさせるものである。

おわりに

ラモン・カバニージャスのガリシア語の分析を終えて、その基盤となるのは popular 大衆的であり豊かな語彙である。カバニージャスが書くことばは田舎言葉でもなく漁師言葉でもない。未来に向けてガリシアを動かすべきリーダーシップの人たちのものである。この原則から出発して気取らず、話者の観点を失うことなく、民衆のガリシア語、すなわち、人々のことばを磨き上げる仕事に洗練して最後までやり続けることであった。

カバニージャスにとって、スペインの共通語であるカスティーリャ語は、多くの場合、作品のなかで主張する力が欠如している。発想するために感情表現は充分とはいえない。したがって、話しことばを洗練するようにならなければならない。同時に創り上げる感情的かつ概念的の世界を表すことができる

語彙を組み入れることであった。

総括して述べることができるのは、19世紀のガリシアの文芸復興期の後、1920年代に文学的共通ガリシア語に向かっていった傾向があるが、最も明晰なことばの形式を描こうとした。方言主義、相互方言主義、カステラニスモ、俗語主義、そして詩人が好んだアルカイスモとしてことばを正確に使うように新たな造語を創り上げた。それはガリシア語化である。したがって、詩人の基本はむしろカンバードスの地域のガリシア語の話しことばに置かれている。詩人の故郷サルネースの口語ガリシア語の小さな国境を越えるために選んだことばを作品のなかで使用することを意味している。それは最も洗練された言語のモデルを獲得する意思であった。

参考文献

文学作品

- Cabanillas, Ramón (1951): *Antifona da cantiga*. Vigo, Galaxia.
- Cabanillas, Ramón (1959): *Obra completa*. Buenos Aires, Ediciones Galicia, 1978 a segunda edición.
- Cabanillas, Ramón (1979, 1981): *Obras completas*, I. II. III. Edición e notas de X. Alonso Montero. Madrid: Akal.
- Cabanillas, Ramón (2009): *Poesía galega completa*. Edición de X. María Dobarro e X. Ramón Pena. Vigo: Xerais.

研究書目

- Academia Galega, Real (1997): *Diccionario da Real Academia Galega*. 1988, a segunda edición. A Coruña.
- Academia Galega, Real e Instituto da Lingua Galega (2004): *Vocabulario ortográfico da lingua galega* (VOLGa). A Coruña.
- Álvarez, R., Monteagudo, H. e Regueira, X.L. (1986): *Gramática galega*. Vigo: Galaxia.
- Álvarez, R. e Xove, X. (2002): *Gramática da lingua galega*. Vigo: Galaxia
- Chacón Calvar, Rafael e Rodríguez Alonso, Manuel (1992): *Diccionario crítico de dúbidas e erros*. A Coruña: Edicións do Castro.
- Feixó Cid, Xosé (2003): *As normas ortográficas e morfolóxicas da lingua galega*. Actualización, complementos e desviacións. Vigo: Edicións do Cumio.
- Fernández Rei, Francisco (1990): *Dialectoloxía galega*. Vigo: Xerais.
- Fernández Rei, Francisco (1999): *Ramón Cabanillas, Manuel Antonio e o mar da Arousa*. A Coruña: Real Academia Galega.
- Fernández Rei, Francisco (2020): “O papel de Ricardo Carvalho Calero no proceso de codificación da lingua

galega”, *A Trabe de Ouro*, 115. Santiago, Atlántica. 9-37.

Fernández Salgado, Benigno (1991): *Diccionario de dúbidas da lingua galega*. Vigo: Galaxia.

Ferreiro, Manuel (1996): *Gramática histórica galega*. Santiago de Compostela: Edicións Laiovento.

Freixeiro Mato, X. R. (2006): *Gramática da lingua galega*. II Morfosintaxe. Vigo: Promocións Culturais Galegas.

Hermida Gulías, Carme (2001): *Ortografía páctica*. Santiago de Compostela: Sotelo Blanco.

Hermida Gulías, Carme (2004): *Gramática práctica (Morfosintaxe)*. Santiago de Compostela: Sotelo Blanco.

Iglesia Alvaríño, Aquilino (1959): “Lengua e estilo de Cabanillas”, en Ramón Cabanillas, *Obra completa*, Ediciones Galicia, Buenos Aires, 1959. 835-922.

Irmandades da Fala (1933): *Vocabulario castellano-gallego*, La Coruña: Moret. Madrid: Enxembre orde da Vieira, 1979.

Larson, Pär (2019): *A lingua das cantigas*. Gramática do galego-portugués. Vigo: Galaxia.

Leandro Carré Alvarellos (1928): *Diccionario galego-castelán*. A Coruña: IGOL, 1984 outava edición.

Lugrís Freire, Manuel (1922): *Gramática do idioma galego*. A Cruña, Moret. 1931 a segunda edición.
Ed. facsímile, Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega, 2006.

Santamarina, Antón (1974): *El verbo gallego*. Verba Anejo 4, Universidade de Santiago de Compostela.

浅香武和編著 (2013):『ガリシア心の歌ラモーン・カバニージャスを歌う』東京、論創社

浅香武和編著 (2018):『新ガリシア語文法』日本学術振興会科研費報告書

浅香武和編訳 (2020):『百様の薔薇・ある愛の祈祷書』増補版、大阪、銀河書籍

浅香武和編訳 (2021):『フランケイラの聖地巡礼』大阪、銀河書籍